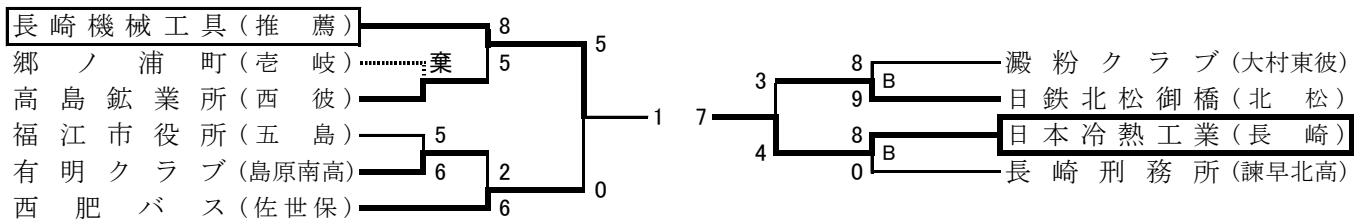


初の長崎勢同士の決勝戦を制したのは、初出場の日本冷熱工業

第11回県下郡市対抗準硬式野球選手権大会	会期： 昭和36年10月28日(土)～29日(日)
	会場： A・長崎市宮大橋球場 B・三菱球場



第11回大会は大橋球場で絢爛の入場式を皮切りに大会の幕をあけた。気遣われた天候もどうか回復、降り続いた雨によりグラウンドコンディションは悪かったが、午前9時10分の開幕を告げるファンファーレを合図に県警ブラスバンドの吹奏する行進曲によってライト側入り口から、国旗ならびに大会旗、審判団が姿を見せ、前年度優勝で推薦出場の長崎機械工具を先頭に各地区から選りすぐられた精鋭が入場して、堂々の歩を進めた。壱岐地区の郷ノ浦町は船便が欠航のため棄権となったが、参加9チームの選手を代表して、長崎機械工具の平尾国広選手が選手宣誓を行なった。



引き続き来賓の小松副知事が始球を投じて第1試合の福江市役所ー有明クラブの試合が開始された。

(昭和36年10月29日付けの長崎新聞より記事と写真は抜粋)

初回の失点はね返す 有明ク、小刻みに加点

【一回戦】大橋：第1試合 振球犠盗併残失

福江市役所	400 010 000	5	8	4	2	3	0	13	2	2時間11分
有明クラブ	013 011 00X	6	4	6	1	2	0	11	4	

【三】大平 【二】加藤、伊達、山下竜

【福江】打安点

⑥ 岩村	4	1	0
② 金田	3	1	0
⑤ 三村	5	0	0
⑬ 山下竜	5	3	2
⑦ 山口	4	2	0
④ 上河	4	1	0
⑧ 松本久	5	3	2
③ 杉	3	0	0
1 山下一	2	1	0
⑨ 中村	3	0	0
H 松本昌	1	0	0
	39	12	4

【評】両軍投手の不出来から乱戦模様となったが、有明クラブが初回に失った4点の負担をはね返して逆転勝ちした。

有明の先発中村は球威もコントロールも無く立ち上がり山下竜にタイムリー打され1点、尚も二死満塁のピンチを招いて早くも降板。代わった鬼塚が松本久に一二塁間を抜かれたあとエラーもあって4点を先取された。しかしその後は鬼塚が打たれながらも要所を締めて、五回に山下竜から中前に叩かれ1点を加えただけの好投をした。

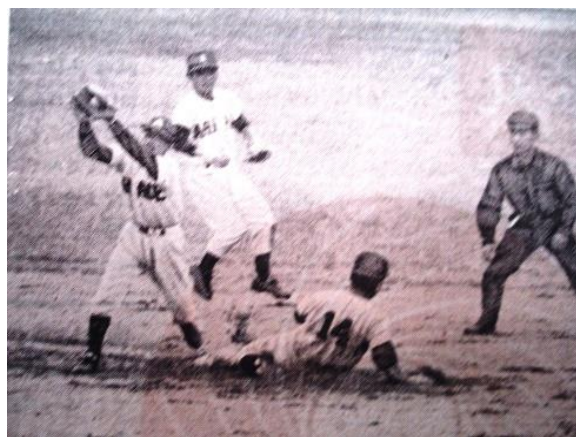
その間に有明打線はジリジリと反撃にうつり、二回と三回に5安打を集めて4点を返し、五回にリードされた1点も三塁打の大平が伊達の左犠飛で還り再びタイとした。こうなると追う者の強味。六回二死一二塁に加藤の一塁後方の飛球を二塁手が落球(記録は安打)する幸運に恵まれて1点のリードを奪い、これが決勝点となった。

福江市役所は昨年の大会で九電工佐世保に完投勝ちした九電五島の山下竜を唯一の補強選手で臨んだが、その頼みの山下竜の投球が高めに流れ、カーブの切れも悪いという不調から4点のリードをフイにしたが、粗雑な攻撃で再三のチャンスを逸して追加点を挙げ得なかったのも敗因の一つといえる。

有明クラブは昨年10月に村体協の野球部として発足した新鋭のチームで学校や役場の職員が主力となっている。

【有明】打安点

③ 松本	4	1	0
⑧ 井原	5	1	0
⑥ 長池	4	1	0
⑦ 加藤	5	2	1
⑤ 長野	4	0	0
④ 大平	3	2	1
② 伊達	3	2	3
① 中村	0	0	0
1 鬼塚	3	0	0
⑨ 藤田	3	1	1
	34	10	6



3回表福江市役所、打者山口のとき一塁走者山下竜が二盗に成功する

原の三塁打でとどめ

入江が大会第1号本塁打

【二回戦】大橋：第2試合 振球犠盗併残失 2時間34分 (延長10回)

長崎機械工具	020 000 200 4	8	6	4	3	2	2	6	3
高島鋳業所	000 012 010 1	5	3	5	2	4	1	8	3

【本】入江 【三】藤枝、佐藤、原 【二】佐々野2、中原

【長崎】打安点	【高島】打安点
④7 入江 4 2 2	④51 毛利 5 0 0
⑧成宮 2 0 0	⑦8 中原 5 2 0
4 佐藤 2 1 1	⑥長崎 4 0 0
⑦8 佐々野 4 2 0	⑨樫谷 2 0 0
⑨原 5 3 2	3 森 1 1 0
③小西 5 1 1	⑤15 尾崎 4 2 1
②平尾 3 0 0	⑧船津 2 1 1
⑥藤枝 5 1 1	7 石原 0 0 0
①茂 1 0 1	③9 渡部 4 2 2
1 宮原 3 0 0	②高比良 0 0 0
⑤平山 4 0 0	2 牛島 4 2 0
38 10 8	①秋本 0 0 0
	4 榊 2 0 0
	33 10 4

【評】延長10回の長崎機械工具は先頭の佐藤が左越え三塁打、佐々野が歩いて原の一打は左越え三塁打で二者を選して食い下がる高島鋳にとどめを刺した。この後、小西も三遊間を抜いて好投の尾崎を降ろしさらに一塁失策で4点目をあげた。

それまでの長崎は全くピンチの連続だった。二回には藤枝の三塁打と茂のスライズで2点を先行。先発の茂は四回まで高島打線を無安打に抑えて快調の滑り出しだった。五回に茂が尾崎に尾崎に叩かれ、バントエラーで無死一三塁のピンチを招いたところで宮原をリリースに送ったのは、茂が限界と見られていただけに当を得ていたが、肝心の宮原が不調。代わりばなを渡部に叩かれて1点与えたのは仕方無いとしても、六回に中原の二塁打と四球で二死一二塁のピンチを招き、捕逸と船津の中前打で逆転された。それでも七回に敵失走者を二塁に置いて入江が左翼席に大会第1号を叩き込み、再び優位にたったが、それも束の間、八回に森と渡部の安打でタイにされた。

今大会の高島鋳業所は端島炭鋳との混成チームで参加。10回裏に意地の3安打を集中して1点だけはね返した。

【有明】打安点

③松本 4 0 0
⑤永野 3 0 0
⑥長池 4 1 0
⑦加藤 4 0 0
⑧井原 4 1 0
④大平 4 1 1
②伊達 1 0 0
2 吉田 2 0 0
①中村 1 1 0
1 鬼塚 2 0 0
⑨藤田 2 0 0
31 4 1

西町15三振を奪う

【二回戦】大橋：第3試合 振球犠盗併残失

有明クラブ	000 001 001	2	15	3	0	1	0	4	1
西肥バス	001 101 03X	6	2	2	1	6	1	7	2

【三】喜々津、長池 【二】喜々津、田中 1時間42分

【評】西肥バスは有明クラブの2投手の軟投に手こずり、三回は捕逸で1点を拾い、四回は田中の二塁打で、六回は一塁手の野選でと、小刻みにしか得点できないという西肥バスらしくない攻撃ぶり。やっと八回に三塁失をきっかけに二死後から3連打で3点を加えてとどめを刺した。

エースの西町は内角シュートに切れのよいカーブをうまく配して、15三振を奪い、六回は捕手の二塁悪投で、九回には長池、大平の長短打でそれぞれ1点を許しただけの余裕あるピッチングだった。

西肥バスは二年ぶり5度目の出場だが、33年に優勝した時のメンバーはほとんど代わっていない。

【西肥】打安点

⑥清水 5 0 0
⑦飯田 4 1 0
⑤南里 4 1 0
④波井 2 0 0
②緒方 4 2 0
①西町 3 0 1
⑨田中 4 2 2
③井崎 2 0 0
3 浮田 2 1 0
⑧喜々津 4 2 2
34 9 5

【二回戦】三菱：第1試合 振球犠盗併残失

日鉄北松が逆転勝ち

澱粉クラブ	101 042 000	8	5	4	3	1	0	8	1
日鉄北松御橋	100 060 011x	9	4	1	0	0	0	8	1

【二】畑田、草野、木原2、田中、小川、小辻2、小田原、荒木2、大島

【北松】打安点

【澱粉】打安点

⑥草野 4 1 0
⑦田中 2 1 0
②1 荒木 4 2 1
①913 中野 4 2 2
⑤大島 5 2 1
⑧永尾 5 1 0
③4 小川 5 1 2
⑨19 中尾 5 1 2
④2 吉岡 3 0 0
37 11 8

【評】追いつ追われつの一戦一戦のシーズンゲームで勝負は最後まで分からない打撃戦となったが、日鉄北松は最終回に小辻の右越え二塁打でサヨナラ勝ちした。

初回、澱粉クは敵失と犠打二進後に中野の左前適時打で、日鉄北松は亀沖と畑田の短長打で1点ずつを挙げた。リードを取ったのは三回の澱粉で二塁打の草野を三進させ大島の遊ゴロ併殺崩れで1点、五回にも先頭の田中が左翼線二塁打。ここで畑田が登板したが4長短打を集中して4点を奪って試合を決したかに見えたが、粘り強い北松はその裏に疲れの見える中野の浮いた球をすかさず米倉、井上、亀沖が左右に連続パンチを浴びせて中野をKO。救援の中尾にも小辻、代打の小田原の連続二塁打と敵失で一挙6点を奪い、逆に1点リードした。

リードを許した澱粉は六回に死球と2本の二塁打で2点を入れ又も1点をリードしたが、火のついた北松打線を抑えることができずに、八回に2長短打で同点にされ、マウンドには荒木を送って防戦にあっていた。

⑦井上 5 2 0
⑥亀沖 5 3 0
⑤木原 4 2 2
②進藤 4 0 0
⑧1 畑田 5 3 1
①8 米村 5 0 0
④小辻 5 2 3
③徳永 2 0 0
H3 小田原 2 1 1
⑨米倉 2 1 0
R 佐々木 0 0 0
9 砂田 1 0 0
40 14 7

日冷工15安打

【二回戦】三菱：第2試合 振球犠盗併残失

日本冷熱工業	005 62	13	1	4	0	1	0	5	1	1時間8分
長崎刑務所	000 00	0	7	0	0	0	1	2	2	

【日冷工】打安点

⑦梅井	4 2 0
⑧每熊	4 2 1
⑥伊東	4 2 1
②川内	3 2 3
⑨酒田	3 1 0
④浜辺	3 2 0
①的野	3 2 3
③川口	3 2 4
⑤宮原	3 0 0
30 15 12	

【本】川口【二】每熊、浜辺2、的野2、川内、酒田

【評】五回までに8本の長打を含む15安打13得点の日冷工が長崎刑務所をコールドで下した。三回に日冷工は每熊の二塁打をきっかけに川内の右前、浜辺と的野が連続の中越え二塁打に、川口の三遊間安打や四球など打者一巡で大量5点を奪った。四回には梅井、川内の長短打で白川をKO、代わった下釜にも的野が左越え二塁打、続く川口が真ん中高目の直球を左に大会第2号本塁打し、この日も打者一巡させて6点。五回にも4安打を浴びせて2点を追加する猛打だった。

一方の長崎刑務所は4年ぶり4回目の出場だったが、的野投手の伸びのある内外角攻めの速球に手が出ず2安打7三振の貧打でシャットアウトを喫した。前で当てる短打戦法で行けば変化球が無かっただけに何とか得点はできただろう。

【刑務所】打安点

⑥峰	2 0 0
②中村	2 0 0
①④白川兄	2 0 0
⑧松本	2 1 0
③白川弟	2 0 0
⑦本田	2 0 0
⑤松尾	2 0 0
④佐藤	1 0 0
1下釜	1 0 0
⑨中川	1 1 0
H中	1 0 0
18 2 0	



【準決勝】 振球犠盗併残失 2時間10分

長崎機械工具	010 002 002	5	4	4	2	2	0	5	0	【三】佐々野、平尾
西肥バス	000 000 000	0	8	3	0	0	1	6	2	

【長崎】打安点

⑨入江	5 0 0
④佐藤	4 0 0
⑦佐々野	4 1 1
①原	3 0 0
③小西	2 0 1
⑧成宮	4 2 0
②平尾	4 1 1
⑥藤枝	2 1 2
⑤平山	3 0 0
31 5 5	

【評】原と西町、両左腕投手の対決となったが、チャンスを確実に得点に結びつけた長崎に凱歌が上がった。西町はシュートにカーブをうまくミックスする巧いピッチングだったが、いま一步の制球力不足。二回に連続四球と成宮の安打で無死満塁のピンチを招き一死後に藤枝に選ばれて押し出し点。その後の西町は五回まで3人ずつを簡単に片付けていたが、六回に名手南里のエラーがたまずきとなり佐々野に右越え三塁打を喫し、小西のスライズで2点を失い、九回にはスピードの落ちたところを成宮と平尾の連続長打と藤枝にも適時打され致命的な2点を与えた。このあたり長崎は四度の好機を三度までモノにするソツのない攻撃ぶり。一方の原投手の出来は良かった。スピードも十分あり、カーブのコントロールも良く西肥バス打線を4安打散発に抑え、ピンチといえば三回の二死三塁と九回二死一三塁だけ。これも冷静に後続を断って完封した。

【西肥】打安点

⑥清水	4 1 0
⑦飯田	4 1 0
⑤南里	3 0 0
④波井	3 0 0
②緒方	4 1 0
①西町	4 0 0
⑨田中	2 0 0
③浮田	3 1 0
3井崎	0 0 0
⑧喜々津	3 0 0
30 4 0	

【準決勝】 振球犠盗併残失

日鉄北松御橋	001 002 000	3	6	0	0	0	0	4	1	1時間49分
日本冷熱工業	101 200 00X	4	2	5	2	3	0	9	1	

【北松】打安点

⑤木原	4 1 0
⑥亀沖	4 1 0
②進藤	4 1 0
⑧畑田	4 1 0
①波多	4 1 1
⑦米村	4 0 0
③小田原	4 1 2
④小辻	1 0 0
4砂田	2 0 0
⑨井上	3 0 0
34 6 3	

【本】小田原【三】木原、酒田【二】畑田、波多、伊東、的野

【評】日冷工は毎回のように走者を出したが拙い攻めでようやく勝った。北松の波多投手の立ち上がりは球に伸びが無く予選から上げ潮の日冷工打線は、初回に梅井が痛打、每熊とのヒットエンドランも一二塁間を見事に破り、伊東の左線二塁打で先取。一走の每熊も三塁を回って本塁を突いたが憤死。この後、川内の左前打と四球の一死満塁は遊飛と中飛で1点止まりに終わった。三回表、小田原に左翼席へ同点弾された裏の日冷工は四球後に酒田の三塁打で、四回には的野、川口、梅井の連続長打打で加点し、3点のリードを奪った。しかし昨年に続いて四度目の決勝戦進出に燃える日鉄北松御橋は六回に、四回途中から代わった的野投手に亀沖と進藤が連打、波多の左越え二塁打などで激しく反撃し1点差に迫ったが後が続かず、結局1点差に涙をのんだ。

【日冷工】打安点

⑦梅井	4 3 0
⑧每熊	4 1 0
⑥伊東	3 1 2
②川内	3 2 0
⑨酒田	3 1 1
④浜辺	4 0 0
⑤①的野	4 1 0
③川口	3 1 1
R林	0 0 0
3浜崎	0 0 0
①梅原	1 0 0
5宮原	2 0 0
31 10 4	

昭和36年の全国大会における長崎県代表チームの戦績

天皇賜杯第16回全日本軟式野球大会【51チーム】

(S36. 8. 16～:京都市)

九州電気工事【一】8-4 住友弥生炭鉱(北海道)

【二】0-1 野田合板(静岡)

第16回秋田国体(27チーム)には不出場

第12回西日本準硬式【25チーム】5. 13～:広島県

親和銀行【一】0-4 三井金属竹原(開催地)

第5回高松宮賜杯全日本大会 9. 2～:富山県

1部(10チーム)は九州ブロックから福岡が出場し初戦敗退
2部(10チーム)は九州ブロックから佐賀が出場し初戦敗退

長崎同士の 決勝戦対決 初出場の日本冷熱工業に栄冠

栄冠はついに初出場の日本冷熱工業の上に輝いた。決勝戦は前年度優勝の長崎機械工具と初出場の日冷工の、初の長崎同士の対戦となったが、日冷工が7-1で機械工具を破った。九回裏、日冷工の梶山が機械工具の原が放った右前ライナ

ーを転倒しながら好捕、ウィニングボールとなると三塁側スタンドから歓声が上がった

(昭和36年10月30日付けの長崎新聞より記事と写真は抜粋)

日冷工の打線爆発 連投の原をKO

伊東のホームーで止め

【評】機械工具の原は連投のため、西肥バス戦のようなスピードが無く、球が高めに浮き気味。しかもカーブの切れが悪かった。これをこのところ当たりまくっている日冷工打線が見逃すはずは無く、一回一死二三塁のチャンスは逃がしたが、二回に浜辺、宮原の安打で一死二三塁に大塚が左中間を破って2点を先行した。好調の波に乗る日冷工打線は四回にも原をとらえ、川口、宮原の長短打でつかんだ無死二三塁に、大塚と加藤が連続スクイズに成功し2点を加え、五回には伊東が左翼スタンドに大会第4号ホームーを放って原をKOした。

ここで機械工具は佐々野をリリーフに送ったが遅すぎた感じ。勢いに乗った日冷工は六回に宮原、大塚の連続長打と毎熊の二塁イレギュラー安打で2点を加え機械工具の命脈を断った。

機械工具は四回に安打の佐藤が小西の二ゴロで二進後に原の左中間タイムリーで1点を返したが、この四回を除くと大塚の内角シュート、外角カーブのコンビネーションに手が出ず、七回にいい当たりが出はじめたものの、中堅毎熊のCANのいい守備に好捕され、八回からリリーフしたエース的野に反撃の望みを断たれた。

【決勝戦】	1時間45分			振球 犠盗 併 残 失							
長崎機械工具	000	100	000	1	3	1	0	0	1	3	0
日本冷熱工業	020	212	00X	7	2	3	2	3	0	7	0

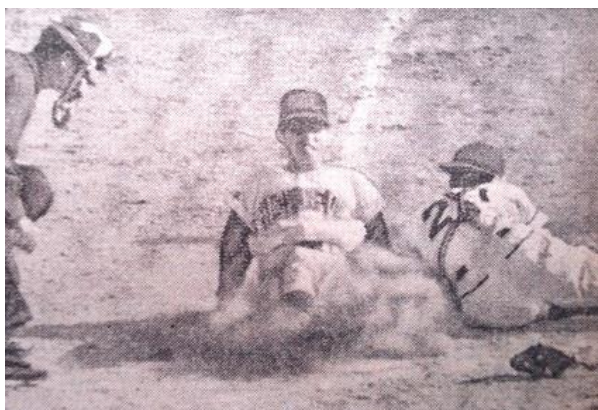
【本】伊東【三】宮原【二】大塚2、川口、成宮

【長崎】打安点

④6	佐藤	3	1	0
③	小西	4	1	0
⑨	入江	4	0	0
①7	原	4	1	1
⑦1	佐々野	3	0	0
⑧	成宮	3	1	0
②	平尾	3	0	0
⑥	藤枝	2	0	0
H	山外	1	0	0
4	宮崎	0	0	0
⑤	平山	3	0	0
		30	4	1

【日冷工】打安点

⑦	梅井	2	0	0
H	加藤	0	0	1
7	浜崎	1	0	0
9	梶山	0	0	0
⑧	毎熊	5	2	0
⑥	伊東	3	2	1
②3	川内	4	0	0
⑨2	酒田	4	0	0
④	浜辺	4	1	0
③	川口	3	1	1
7	林	0	0	0
⑤	宮原	4	3	0
①	大塚	2	2	4
1	的野	1	1	0
		33	12	7



4回裏日冷工代打加藤の投前スクイズで三塁から宮原が生還し4点目(捕手=平尾、球審=伊藤)



前野監督を胴上げする日冷工ナイン

個人表彰

- ◇最高殊勲選手賞=大塚征(日冷工)
- ◇首位打者賞=梅井征爾(日冷工)
9打数5安打(,555)
- ◇敢闘賞=原広彌(機械工具)
毎熊省吾(日冷工)
- ◇勝利監督賞=前野士朗(日冷工)

試合終了後に閉会式が行われ、三塁側に優勝した日冷工、一塁側に惜しくも涙をのんだ機械工具が整列。優勝の日冷工の梅井主将の手に佐々木大会会長代理から優勝旗が手渡され続いて桑原会長杯、読売杯ならびに賞品が贈られ、機械工具にも準優勝杯や賞品が渡された。次いで個人表彰があった後佐々木大会会長代理のあいさつがあり、県警ブラスバンドの行進曲にのって場内を一周したが、梅井主将の手にしっかりと握られた優勝旗に歩を進める日冷工ナインは感激にほおも紅潮していた。スタンドを埋めた観衆から勝利を称える拍手が鳴り止まなかったが、惜しくも敗れた機械工具ナインにも惜しめない賞賛がおくられた。